

## 「総合評価」高得点のわけ

田島 俊郎（徳島大学 総合科学部）

フランス語の授業の「総合評価」が高得点であるはずがない。多分この評価はなにかの間違いです。

何よりの証拠にフランス語は受講生が少ない。なぜフランス語に受講生が少ないのか。フランスという国が魅力的ではなくなってしまったのか、リンガフランカ（共通語）としてのフランス語の地位の低下によるのか、フランスの魅力やフランス語を学ぶことのメリットを担当者がアピールできていないのか。

それにそもそもフランス語は成績評価が厳しい。授業評価アンケートの「総合評価」でフランス語に高得点をつけてしまった受講生諸君は厳しい成績評価を見て後悔しているに違いない。

だが、受講生が少ないということは、フランス語を受講する学生諸君にとっても担当者にとっても幸いである。評価が厳しく単位も取りにくいのに、学生による授業評価がそれほど悪くないのは、クラスの人口密度が少ないことが一因なのは間違いない。教室の人口密度が少ないと教師に名前を覚えられるし、何度も指名されるという利点（欠点かもしれないが）もあるし、質問や発言もしやすくなる。教師もひとりひとりについて進度や能力を把握することができる。

それほどオリジナリティがある工夫でもないけれど、少人数であるゆえにできる工夫を以下に紹介しよう。

そもそも学問や技術とは、多くの事象を観察し、それらの事象の背後にある一般則を見つけ出し、その一般則を応用する、というものだろう。言語の習得とてかわることはない。発話を多く聞き、多く発音し、その結果として発音規則と語彙と文法を身につける。生まれた瞬間から聞くことばであれば、赤ん坊は生まれてすぐに周囲の大人たちからことばのシャワーを浴び、聞いた音をまね、修正され、勇気づけられ、ことばの有効性を認識し、コミュニケーションの規則を発見し、発見した規則に則って発話を試み、大人に褒められたり、修正をうけたりしつつ、その言語を母語として身につけることになる。外国語学習でも、母語を身につけていくように最初にできるだけ多くの発音を聞いて、まねて、基本的な語彙と文法を自分で発見して身につけることが大事である。

そこでフランス語入門の4月5日には発音にできるだけ多くの時間をさいている。発音の練習は口立てで行う。昔の寺子屋の漢文の素読のように、あるいは小学校1年生の国語の時間のように、教師に続いてみんなで声を合わせ、何人かが代表して朗読する。CDやDVDなどで聴かせるネイティブスピーカによる音源は貴重だが、それほど多くは使わない。教師が発音してみせると受講生の警戒心も緩むのか声がよく出るようになる。最初は意味不明な音の連なりを繰り返す作業なので、母語との違いのどこに注意してまねるべきなのか、どの違いは無視して

よいのかわからない。その場に居る教師だからこそ学生の発音の成長に寄り添って、聞きなれた母語の音から外国語の耳慣れない難しい音に導いていける。最初は「クロワッサン」や「ショコラ」などの外来語をカタカナ音から始め、徐々に知らない単語を発音する。フランス語と言うよりはカタカナ語のようなフランス語でも、とがめずに声が出ることを大事にする。

朗読するだけでは足りない。発音した文章を暗記する。できればその日学んだ文をすべて暗記したいのだが、時間が足りないので、文法事項を含む文や、頻出語彙を含む文を選んで暗記させる。教室で暗記し暗唱する時間を 10 分から 15 分ほど取る。暗記は、本当は自宅学習に期待したいところだが、努力を期待したい受講生に限って自習しないようである。時にはひとりひとりで、時にはペアを作って覚えさせる。コミュニケーションの手段を学んでいるのだからひとりっきりでやるよりも、他者とかかわるようにペアを作るほうがよさそうのものだが、これはこれで難しい。まず自主的にペアが作れない。たがいに恥ずかしいのかなかなか相手を決められない。といって、すぐできるペアにも問題はありそうだ。暗記練習を装いながら昼ごはんの相談をしたりするし。

暗記する文は徐々に長く覚えさせる。一つ一つの文も長くなるし、文の数も多くなる。長い文を効率的に暗記するためには文の構造をきちんと分析できていなければならない。たとえば、「Je suis content de jouer avec ma cousine.」「ぼくはイトコと遊べて嬉しい。」というような文を覚えるとする。文法語である je, de, avec, ma などはずでに何度も出てきて文の構造を支える道具であることに気づいている。優秀な学習者はこれらの文法語に早くから馴染んでいる。文法語に馴染んで、S+V+C などの語順と文法構造を認識すると、文全体は無意味な音の羅列ではなく、意味のある構造体として認識できる。その中の少しの音だけが初めて見る知らない単語である。文法語がわかれば未知の単語を分離・抽出することができる。構造を認識すれば短い単語や句や節を組み合わせて、長い文を少ない苦労で覚えていくことができるようになる。

もっとも残念ながら文法語でもなかなか覚えられない受講生もいる。Je は一人称単数の主語人称代名詞だから何度も何度も繰り返し見て聞くので覚えられないはずがないように思うのだが、期末試験の時期になっても聞き取りができず、Ju なんてまちがった綴りで書いてしまう受講生も出てくる。

暗記した文章を書けるように、次の授業では書き取りディクテーションを課す。ディクテーションと言っても前の授業で覚えた文章を聞いて書き取るだけなので、復習しておけば完璧に書ける。はずなのだが、復習の手間を惜しむのか、フランス語の綴りを覚えられないのか、なかなか全員満点には達しない。

ディクテーションは言語学習の初歩段階では有効は手段だと思う。入門段階では全く未知の文は書き取ろうにも、手も足も出ないが、一旦暗記した文ならどうにか書ける。すでに身に付けている英語とは似ていながら異なるフランス語の綴りを覚えるのは結構大変なので、音を暗唱するだけでなくディクテーションの材料になることを認識していれば、音と綴りの関連性をいやおうなしに意識せざるをえない。重要例文を選んで暗記させるので、少し上達すれば文法や頻出表現を応用して使えるようになる。

ディクテーションで音を聞いているときには自分の頭の中で発音をシャドウイングしているはずである。たとえ声に出して発音していなくても、頭の中でフランス語の音を響かせながらフランス語を書き行ったら、フランス語の綴りと発音という厄介な問題をクリアしやすくなるだろう。

発音して、暗記して、書き取りをして、という流れは、授業の工夫というほどのこともない当然の流れである。

この先には、身に付けた語彙と文法を組み合わせで自分なりの文を作って発音するというステップがある。知識と技術を習得する受動的な状態から、自分で応用して作り出す能動的な状態へ進む。主に教科書の各課の練習問題の作文を題材にして行う。ただ自発的かつ即興のフランス語会話が成り立つかという残念ながらそこまではたどり着けない。時間がないことが大きな理由だが、教師学生双方の母語である日本語でコミュニケーションが成り立ってしまっているため、フランス語で会話しようというモチベーションが十分に出てこない。

さて学生による授業評価アンケートの「総合評価」で受講生諸君が高い評価を与えてくれたわけだが、担当者としては相対的には高くても絶対的には高得点のはずがないと思っている。なにより担当者が満足していない。最初に書いたように、もう一人の担当者も含めて成績評価は厳しめである。それは担当者が期待する水準に達していない受講者もいるということである。ただこれは受講生諸君の責任よりも、きちんと導いていけない担当者の責任が大きいことは言うまでもない。